



随筆

大学生の頃の思い出

松浦義一^{*1}

教室の編集委員から、「生産技術」の随筆のコラムで何か書いてほしいと依頼があったのは2月半ば頃であった。丁度その頃から、研究室の学部4年次と大学院前期課程2年次の学生が卒業論文のまとめに入り、研究成果のそれぞれについての討論やまとめ方の指導などでかなり忙しい日が続いた。

学生諸君の卒業論文がやっとまとまり、3月に入ると、大学入試が始まり、また卒業生達の卒論発表会、成績提出、卒業資格判定、及び春の学会に発表する我々の論文原稿の執筆等々、年中行事ではあるが、次々とやって来る学内外の用事に忙殺され、日の経つのも忘れていたが、やっと一段落して落ち着いたときは、はや学生諸君の卒業式の日になっていた。

最近の造船不況は深刻で、今春卒業する人達の中で造船所に就職できる人はほんの一にぎりであり、造船に関連のある企業や官庁に就職できる人達を入れても数える程しかないという有様で、心なしか卒業生諸君の顔つきも冴えないように見受けられた。

卒業式の翌日、偶然私の部屋に私の講座の助教授と助手が集ったとき、数年以前の造船好況の時には考えてもみなかったことであるが、造船不況が世間の話題になり出した昨今では、造船学科へ来る学生は一体何を考えて入学し、何を感じて卒業して行くのだろうということが話のきっかけとなり、それでは我々それぞれの大学生時代のことで今でも覚えている程印象の強かったことは何かということに話題が移って行った。我々3人はいずれも阪大工学部造船学科の卒業生であるが、在学した年代の違いによりそれぞれ異った印象が語られた。以下各人の大学生時代の思い出ということで、一人称形式

で記してみた。ひまつぶしのつもりで読んで頂ければ幸いである。

松浦義一（阪大・工・造船・昭21卒）

私にとっては、大学生時代の思い出は戦争の思い出と言いかえても同じことである。中学校の低学年の頃（昭和12年）に始まった日中戦争から次第に戦時色が濃くなり、遂に昭和16年12月8日、日本が太平洋戦争に突入したのは私が高等学校の1年生の時であった。当時、理工系の学生は技術者の卵として優遇され、国の方針として在学期間中は徴兵猶予の特典を与えられたが、その代わり高等学校の在学年数は3年から2年半に短縮された。そして、昭和18年の夏には大学の入試があり、10月には大阪帝国大学工学部造船学科の1年次学生として入学した。

私が阪大の造船学科を選んだのは、特に理由があったわけではないが、当時映画や写真などで見た日本の軍艦の英姿が知らず知らずのうちに働きかけていたのかも知れない。阪大を選んだのは、食料事情や交通機関の事情が急速に悪化しつつあったので、自宅（当時伊丹に住んでいた）から通学できる大学ということで決めた。（阪大工学部は大阪市都島区東野田町9丁目にあった。造船学科は昭和44年秋に現在の場所に移転した。）

1年次の間の授業は大体順調に行なわれた。私達にとって大学生であるという実感があったのはこの1年間位のものであったが、この1年も現在の学生諸君から見れば、想像もできないような異常な状態であった。中学校のときから、学校の正課の授業として軍事教練があったが、大学においても教練の時間があり、阪急電

*1松浦義一（Yoshikazu MATSUURA）、大阪大学、工学部、造船学科、教授、工学博士、造船学

車の服部駅の近くの空地（多分現在の服部緑地のあたりであろう）へ何回か出かけたし、また場所はよく覚えていないが、小銃の実弾射撃に一度連れて行かれたことがある。

戦況が次第に不利になりかけていた頃であり、物資不足、食料難が益々つめてきたため、大学へ出てきても昼食にありつくことがだんだんむずかしくなっていた。大学の学生食堂では食券を発行し、クラス代表の学生がそれをクラスの者に分配していた。しかし、食券がクラス全員の数だけはないので、いつも何人かは食券が当らなかった。大学の近くには、大衆食堂というよりはむしろ飯屋といった方がふさわしいような飲食店が何軒もあり、労働者風の人達に混って工学部の学生がよく行列を作っていたが、これも早く行って前の方に並ばないと当らなかった。このような状態であるから、午前中の授業では12時近くなると学生が何となく落ち着かない感じになってくるのが常であり、特に多数の学生が受講する共同講義のときにそれが著しかった。

「欲しがりません勝つまでは」とか「贅沢は敵だ」というような言葉が叫ばれていた時代であり、一生懸命に働いていないと「非国民」と呼ばれそうな空気がみなぎっていた。そのような時ではあったが、たまに大学の授業をさぼって遊びに出かけるのは楽しかった。クラスの者数名と冬には六甲山へ登り、池の天然氷でスケートに興じたことや、夏には西宮の浜へ出かけ、阪大のヨット部のヨットを借りて乗りまわったことなど、切迫した世相の中での僅かな楽しみの一つとして今でも昨日のこことのようによく覚えている。

ある日、一日中ヨットで遊んでいたため、日に焼けて身体中が痛くてたまらず、翌日の八代先生（故人）の「軍艦設計」の第1回目の講義に出席できなくなった。後日、同じように欠席した仲間と二人で八代先生の所へ受講申請に行ったが、予想したとおり大目玉を食ってしまった。その仲間はいま防衛大学の教授である。

講義といえば、笹島先生（現在名誉教授）の「船舶算法」の講義が印象に残っている。古い

ことだから、講義の内容についてはそれが何であったかよく覚えていないが、先生はよく黒板に色とりどりのチョークを使って実にきれいな図を描いて説明をされた。あまりきれいな図なので、すぐに消すのは惜しいなあと思いながら講義を聞いていたが、先生も同じように考えておられたと見えて、一度描いた図は仲々消されなかった。今ならカラーフィルムで写真に撮っておきたいような図であった。

2年次になる頃（昭和19年夏）、私達のクラスも勤労働員で造船所へ行くことになった。クラスの殆んど全員が川崎重工と播磨造船所（現在の石川島播磨重工相生工場）の二箇所に分かれて行った。このとき、寺沢先生（現在名誉教授）の指名により、私とも一人の学生（鹿児島出身）の2名が造船学科の研究室に残されることになり、先生の指導の下で強度関係の計算や実験のお手伝いをするようになった。

その年の冬から戦況は急速に悪くなり、遂にアメリカの爆撃機や艦載戦闘機による日本空襲が始まった。大阪をはじめとし、周辺の都市が爆弾や大型焼夷弾による攻撃で次々と焼き払われていった。特に、夜間の空襲が強く印象に残っている。大型爆撃機B29の編隊が通り過ぎるとき、日本軍のサーチライトに照し出されて青白く光り、巨大な魚の群が整然と進んで行くようで、何かとてもきれいなものを見ているような気がしたことを覚えている。そして、それが通り過ぎたあとの地上には物凄い大火事が起こっていた。

私の相棒として研究室に残っていたもう一人の学生が、一度帰郷すると言って鹿児島へ帰ったまま、再び大学へは戻って来なかった。そこで私は、川崎重工へ動員で行っているクラスメートの中から、八木さんを大学へ呼び戻して頂くよう寺沢先生に進言し、願いが叶えられた。この人が、現在の造船学科第4講座の八木教授である。

昭和20年に入ってから戦況は益々悪く、空襲が頻繁になった。初夏の頃であったと思うが、遂にわが工学部を含めてかなり広範囲の市街地が殆んど完全に焼き払われてしまう日が来た。それは昼間の空襲であったが、警報が鳴

り、造船学教室の地下の防空壕へ飛び込むや否や焼夷弾が落ちて来た。二度、三度と波状攻撃があり、やっと静かになったので外へ出てみると、あたり一面は火の海で、もうどうにも手のつけようがなかった。造船、航空、精密の3教室が入っている一つづきの鉄筋コンクリート造りの建物だけが焼け残り、他の木造の建物は全部焼けてしまった。このときの馬鹿げた大火事だけはいまだに忘れることはできない。空高く舞い上った黒煙のため、まだ昼間だというのに大阪の空は見渡す限り一面に赤黒く染まり、この世のものとは思えない程気味の悪い色をしていたし、火事による上昇気流のため、周囲から吹き込んで来る風が台風のように吹き荒れていた。そして、しばらくすると墨汁のような真黒な雨が夕立のように降って来た。後で知ったが、この空襲で通信工学科の大学院特別研究生が一人、焼夷弾の直撃を受けて亡くなったということである。

その年の夏、私は病気になり、阪大病院へ入院して手術を受けた。病名は肋骨カリエスであり、右側の肋骨3本を切除する大手術であった。手術後2日目に終戦の日を迎えた。昭和20年8月15日である。何日か経ち、やっとそろそろ歩けるようになったとき、夕暮に病院の屋上へ出てはじめて終戦後の大阪の町を見た。あたり一面に人家の灯がともっていた。長い間、灯火管制下での真暗な町ばかりを見なれて来た私に、この光景は何年ぶりかでなつかしい故郷へ帰って来たような、何かホッとしたような気持を覚えさせた。

退院後6か月の休学をすることになり、専ら自宅で療養に努めた。学年は3年次になっていた。しかし、その後は大学へ出ていないので、大学の様子はよくわからなかったが、終戦時の混乱から少しずつ落ち着きを取り戻し、ぼつぼつ授業も再開されていたようである。私は病後の経過が非常によく、快復も速かったので、来るべき学年末試験に備えて独りで勉強をはじめた。既に再開されていた造船学科の科目については、八木さんが時々自分のノートを借してくれたので大いに助かった。毎日家にいたので、時間の余裕は十分にあった。そこで、私は卒業

論文もその間にやってしまうことにした。終戦前に寺沢研究室でいろいろやっていたことの中から、興味をもっていたものを選んでテーマを決めた。理論だけでまとめたので、3か月位でできてしまったように思っている。

昭和21年9月、私達のクラスは卒業した。言うまでもないが、就職は惨澹たるものであった。八木さんは、寺沢先生の第4講座の助手になった。私は、休学のため半年遅れて卒業し、寺沢先生の講座の助手に採用された。

以下は、日本が戦後の復興も終り、高度経済成長の途上にあるときに大学生時代を過した若手教官達の話である。

富田康光*² (阪大・工・造船・昭40卒)

私は、大学進学については、最初は医学部に進むつもりであった。高校3年生のとき、叔父の友人の外科医の人の特別の計らいで、手術を見学する機会を得た。手術は右脚大腿部の骨折の治療でかなりの大手術のように思われた。切開した部分の内部の色、出血、患者のうめき声など、とうとう一時間余りで気分が悪くなって退室した。看護婦でも慣れるまでは気分が悪くなると後で聞いたが、その時にはこれで自分は医者には不向きだと思った。それでも結局は受験したが、幸か不幸か失敗した。

そこで、小さい頃から模型作りが好きだったので、今度は本物の潜水艦を設計したくて造船学科を選んだ。実際は、模型作りも好きではあったが、映画で見る潜水艦の内部のシーンで、艦長が潜望鏡を覗くとき帽子をくると後へまわす仕草が大好きで、自分も一度やってみたかったのである。しかし、潜水艦には乗れないので、せめて船乗りにといい、舶海科を受験したかったが、これも視力の点で受験資格がなく、そこで造る方を志願したという次第である。

*²富田康光 (Yasumitsu TOMITA), 大阪大学, 工学部, 造船学科, 助教授, 工学博士, 造船学

私が大学入試を受けた頃と比べると、最近は随分変わってきたと思うことがある。それは、毎年2月ともなれば各都市のホテル、それも一流のホテルが受験生で一杯になると聞く。しかも親子で宿泊する数が相当多いそうである。

私の場合は、大学受験のときは宝塚ヘルスセンターに泊った。受験の前夜、卓球をして遊んだが、私が明日から入試だということがわかり、相手をしていていた従業員の人が途中から大変気をつかい出したこと、また試験が終わってから誰もいない大浴場で浴ぎまわったことなどを思い出す。それから、ある所での受験のときは、寄泊の予約をしていなかったため、当地の旅館は満員になっていた。仕方なく、近くの駅員の人に頼み、知り合いの小料理屋を紹介してもらってやっと寝る場所を見つけたが、そこでは夜中まで騒々しかったことなど、いまでもその当時をなつかしく思い出す。

そして、昭和36年4月に私は大阪大学工学部造船学科に入学した。昭和40年3月造船学科卒業、引続き修士課程、さらに博士課程へと進んで行ったが、大学生活の中での大きな出来事はやはりあの大学紛争であった。大学紛争の前後で一体何が変わったのか。あのすさまじいまでのエネルギーを投入した割には、変化は余り見られないように感じる。結局、大学を構成する構成員が変らなければ、相当な紛めごと時間も解決し、元に戻るのであろうか。それにしても、学生生活がある意味では棒にふる当事者達には何が残ったのであろうか。

このように見てくると、専門の分野での取り組み方においても、自分自身が変わらないから、余程の努力と覚悟をもって当らなければ、新しい考え方、別の角度からの物の見方ができず、発展が望めないのではないかと反省している。

善積広幸*³ (阪大・工・造船・昭49卒)

私が大阪大学に入学したのは昭和45年の春であった。丁度千里丘陵で開催されている万国博の見物人で大阪がにぎわっていた時である。大

学の方は、数年来吹き荒れていた学生運動の嵐も大体静まっていたが、その名残りであろうか、授業の遅れた一年上の学生への講義が5月半ば頃まで豊中キャンパスで行なわれていたため、私達新生は入学式があっただけで、教養部での授業は6月まで行なわれなかった。

その空白期間は、吹田キャンパスにおいて、造船学科の先生方による専門科目への入門とでもいうような基礎的な事柄についての講義を、毎日2時間程受けることによって埋められた。また、時には造船所の見学に連れて行ってもらったこともある。吹田キャンパスでのこの短い期間は、三原(広島県)から出て来て一人暮らしの私には非常によい気分転換となり、クラスの仲間との交流ができたという点ではよかったが、講義そのものは全く理解できなかったというのが正直な所である。

6月になると、豊中キャンパスでの私達1年生の授業が始まり、大学生になったという気持と、いよいよ大学生活が始まったという実感をはじめて持った。そして、教養部における1年半も過ぎ、昭和46年の10月には工学部の造船学科へ移行したわけであるが、私にとって教養部とは、工学部へ移行するための条件として必要な単位を取得するための場であったにすぎなかったような気がする。

造船学科に来てから2年半の間に、専門科目の講義を受け、試験に合格して単位をもらうということを積み重ねて無事卒業したわけであるが、今から考えてみると、私の2年次、3年次の頃は講義に振り回されていたように思われる。それは、講義が多種多様であり、取得すべき単位数が多くて、単位を取ることにのみ気をとられ、講義の内容についての理解が十分でなかったと思われるからである。専門科目に必要な基礎的な学科目を、もっと時間をかけて勉強してみたかった。

最後に、最近の造船学科の学生にとっては大変気になる就職についてであるが、私達の学生時代は造船業界はまさに順風の時代であった。先輩たちにこのことを聞いていたので、4年次

*³善積広幸(Hiroyuki ZENJAKU), 大阪大学, 工学部, 造船学科, 助手, 工学修士, 造船学

になっても特に就職のことで心配することは何もなく、まして最近のように、会社訪問をすることなど考えたこともなかった。就職するにしても、大手造船所に行けると信じていたし、事実私も6月頃までは、大学院への進学がだめな

らばそうしようと思っていた位である。とにかく、就職に関しては私達のクラスは、4年次の10月頃まで殆ど全員が実にのんびりしたものであった。

協会だより

行事案内

定例 第8回 水処理研究会

大阪大学生産技術研究会及び当協会主催による水処理研究会を下記要領にて開催予定

尚、会員諸氏には別途、詳細案内発送

記

日 時 11月16日(金)午前9時～午後5時

場 所 大阪科学技術センター 8階

テーマ 省資源、省エネルギー時代の水処理戦略

講 師 阪大教授 市川邦介氏、末石富太郎氏、橋本 奨氏
大阪市水道局主幹 玉井義弘氏
阪大講師 藤田正憲氏